

II 特別連載 II

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第275回

2020年初旬以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は2大学(大阪工業大学および九州大学)からのレポートを紹介する。

大阪工業大学の活動報告



下村 修
(大阪工業大学
工学部応用化学科
准教授)



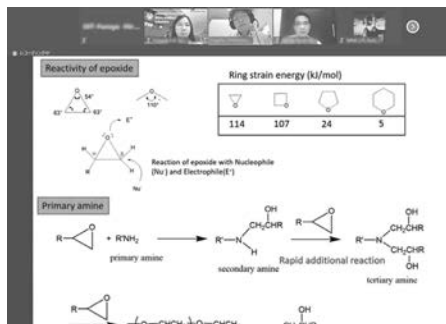
講演会終了後の集合写真

アのための有機化学」を実施しました。参加者への配信はZoomで行い、資料配付と課題提出にはGoogle Classroomを使用しました。有機化合物の構造を描く練習時には、共有ホワイトボードのGoogle Jamboardも駆使しました。講義テーマは「有機化合物の分類」をはじめ、「有機立体化学の基礎」「有機反応機構」「ファインケミカルズ」など多岐にわたり、WMCUSの学生諸君に有機化学の魅力が伝えることができました。

液晶材料合成に関する

PBL型研修プログラム

今年1月19日から1月28日、さくらサイエンスプログラムの支援を受けて、インドネシアの協定校であるウイドヤ・マンダラ・カトリック大学(WMCUS)とオンライン交流を実施しました。新型コロナウイルス感染拡大に歯止めがかからず、海外に出かけること



エポキシ樹脂の反応

のできないなか、学生と教員合わせて約70名が参加し、活発な国際交流を展開することができました。1月19日、1月22日、岡雅弘教授による講義「エンジニ

1月26日…「アミン類をインターカレートしたアルファアリン酸ジルコニウムを熱潜在性触媒として利用するエポキシ樹脂の反応」(下村修准教授、「薬物輸送のための多孔質材料」(WMCUSのSandy Budi Hartono准教授)

1月27日…「リビングアニオン重合を基盤とする立体規則性精密高分子とその機能評価」(平井智康特任准教授)、「ペントナイトを利用するリン酸塩の吸着挙動とリン肥料への応用」(WMCUSのShella Permatasari Santoso准教授)

1月28日…「イオン導電体の開発とエネルギー変換デバイスとしての利用」(松田泰明特任講師)、「パーム油をベースとしたバイオディーゼル中のステリルグリコシドを吸着す

のためのナノ結晶セルロース実用化研究」(WMCUSのMaria Yuliana准教授)

本交流で日本とインドネシア双方の紹介や研究内容の共有を行ったことで、新たな交流のきっかけが生まれました。両大学の学生お

九州大学の活動報告



清水 周次 (九州大学副理事)

医工連携を軸とした

国際遠隔医療教育プログラム

今年2月7日からの21日間、九州大学病院国際医療部アジア遠隔医療開発センターでは、医工連携を軸とした国際遠隔医療教育プログラムの基盤構築と将来設計のため、アジア5カ国より引率者2名を含む優秀な若手人材12名を招へいし、九州大学を拠点とした医療機関で研修を実施する事を予定しておりました。しかしコロナ感染症が全世界的に拡大し、その中止を余儀なくされました。



参加中の様子(フィジー)

そこで今回、来年度の招へい実施時の交流の効果を最大化することを目的として、2月2日に、カザフスタン、キルギスタ、モンゴル、ブータン、フィジー5カ国の招へい予定施設を全て接続したオンライン交流カンファレンスを実施する運びとなりました。



参加中の様子(ブータン)



交流会後の様子(カザフスタン)

コロナ禍という想定していなかった事態に見舞われましたが、本オンラインプログラムを急遽ご計画いただきました科学技術振興機構の皆様へ深く感謝申し上げます。来年度の招へい実施を弊社・招へい予定者共に心待ちにしております。

プログラムは以下の通り

13:00-13:05	開会の挨拶	九州大学病院
13:05-13:15	フィジー	フィジー国立大学
13:15-13:25	ブータン	ブータンケザールギャルボ医科大学、地域医療中央病院、情報通信省
13:25-13:35	モンゴル	国立モンゴル医科大学付属モンゴル日本教育病院
13:35-13:45	キルギス	国立循環器病内科センター
13:45-13:55	カザフスタン	国立がん研究センター
13:55-14:05	プログラムの概要	九州大学病院
14:05-14:25	討論	
14:25-14:30	閉会の挨拶	九州大学病院

よび教員が、今後益々活発に交流を深めていくことが期待されます。最後になりますが、プログラムを遂行するにあたり多大なるご支援を賜りましたJSTの「さくらサイエンスプログラム」に心より感謝申し上げます。